

ニューヨークという街は、ジャズミュージシャンやジャズファンにとって、昔も今も変わりなく最も刺激的な都市である。だが、「六十年代のニューヨーク」が、四十年代

以後のモダンジャズに限っても、格別活況を呈していたというのは、歴史的な事実と言えらるだろう。つまり、今では

△(10)▽



「ジャズ・シャイアンツ」と呼ばれるような偉大なジャズメンたちを、そこかしこで、実にたやすく耳にすることができたからなのだ。

懐古趣味といわれては、年寄りじみて困るのだが、(こしは)くは、幸いその時期二ユーヨークに足を踏み入れる

ことのできた一人のジャズファン(の記録として、そこにたどりつく前の寄り道やら、おつき合いした人たちの思い出やらを交えてお話ししてみよう)と思う。

東京オリオンピクの開かれた一九六四年には、アメリカからのジャズメン来日が、ようやく本格化し、特に、D・エリントンやM・テイヒスの

初来日がファンの話題を呼んで忘れられない年となった。そして身近なところ(目を移すと、この年の春、僕らの「ヤマハジャズクラブ」も、

ささやかにスタートしたのだ。観光旅行は夢の夢

と(ころ)で、当時はドル制限が厳しくて、観光旅行などまるで許可されなかったから、海外に出るのは正に夢物語だった。だから名古屋・白川公

園の「レストラン・コンボ」で親しくなったアメリカ人たちに、「向こうに遊びに来ないか」などと誘われても、実

現する日が来るのかなあと、ただけれど、出発する羽田には

# 招かれて世界一周 聖地巡りひとり旅

かばあきらめていた。だが、運命というのは分らないもの。突然、西ドイツの製薬会社から、アメリカ経由でかまわれないから本社に来て頂けないかと声をかけられた時、本

「新世紀音楽研究所」のミュージシャンたちが、そろそろ現れて、まるで水杯でも交わさんばかりの騒ぎだった。そんな雰囲気、今の人には想像もつかないだろうねえ。



来日したジョージ・ルイス(右端)とニュー・オールスターズのメンバー

マンホール」、そして「ライ トハウス」などに立ち寄り、生のジャズを心ゆくまで楽しんでから、ジャズに魅せられたものが一度は訪れたいと願うニューヨークに降

来日した「ジョージ・ルイス、ニューオールスターズ」は、日本各地で熱狂的に迎えられたが、何しろ平均年齢七十歳を乗に超すおじいさんたちばかり。僕は健康上のチェックを頼まれて、主治医のような役割をつとめていた。

ルイスに注射なんて それにしても、ジャズを聴きはじめたころ、ルイスのクラリネットに何度も涙した僕にとっては、彼らに注射するなんて信じられない巡り合わせのような気分だったのに、

ふだんは波止場作業員などの仕事で生計を立てていたルイスたちから見れば、たとえ三十五歳で息子のように若いドクターであっても、ついつい敬意を払ってしまっただろうか。話しかけると、さっと

直立して「イエス・サー」なんて答えてしまっただ。そんな純朴な年寄りの黒人たちに

年輪を忘れて、いじらしさを感じて胸が熱くなってしまっただねえ。(内田 修)

生のジャズ楽しむ さて、八月十八日、ハワイの地だけれど、僕自身にとっては、別の思い入れもあったのだ。それより前の六三年八月と六十四年五月、続けて